日本医史学雑誌第三十四巻第三号
昭和六十三年七月三十日発行

医史学と私

王丸　勇

もともと歴史が好きであったので、精神医学を志しながらも、医史学にも関心があった。久留米に赴任すると、さっそく郷土史研究会に入会し、この地すなわち有馬藩にも幕末に医学校のあったことを知ったが、その起源や詳細なことは不明であった。

うす暗い同地の図書館で、有馬藩の地行附を調べていたところ、諸役人附の一部に、医学館肝煎として、「文久三亥三月ヨリ始ル」とあるのを発見した。一方明治維新の中心的指導者たる真木和泉守の史料を探していたところ、水天宮で彼が藩主に上訴した「維新秘策」と「秘策」（図1）の原稿を見つけた。

この二つは伏見寺田屋の変で挫折した彼が、久留米の輪番塾に軟禁中に書き、藩主頼咸（よりしげ）に提出したものである。これよりさき、十代藩主頼永（よりとう）の襲封の際も、上書した四部個条のうち大計之部に、医学館の建設・医制の制定の項目はあるが、その内容は伝わっていない。

前記の「維新秘策」「秘策」には、詳しく藩の医学振興策が述べられていて、医学館の開設、医師の待遇、試験制度、遊学、それに薬草園などについて書かれている。間もなく監禁をとかれて登城を命ぜられ、親しく藩主に意見を開陳しているが、その直後医学館の開設となった（図2）。

これらのことから古い医家を尋ねて藩の医学関係のことを調べたことがあり、このため久留米医師会が昭和四十五年に『久留米医師会史』を編纂する際は、「久留米医学の黎明より明治初期まで」を受けもって筆を取った（図3）。

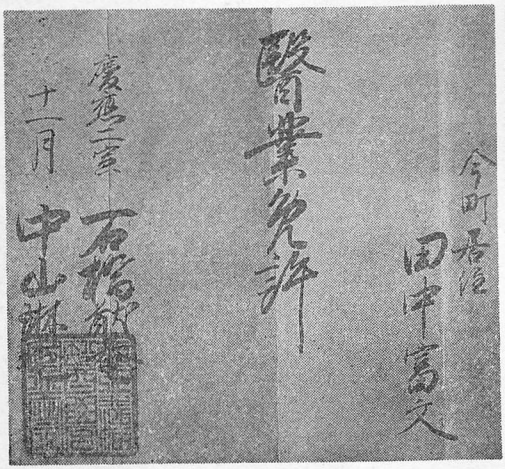

図 3　医師免許証（米藩医学監察の印がある）

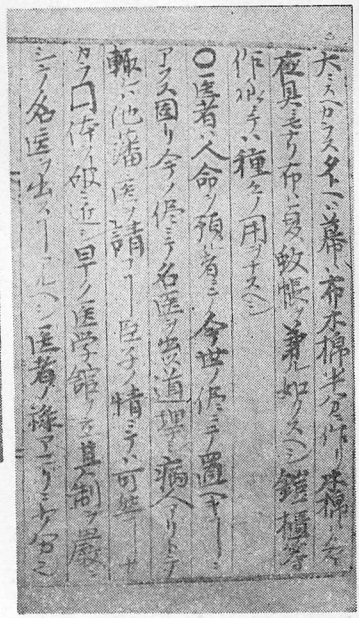

図 1 「秘策」の部分

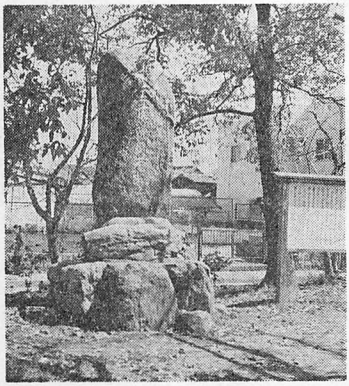

図 4　工藤謙同顕彰碑

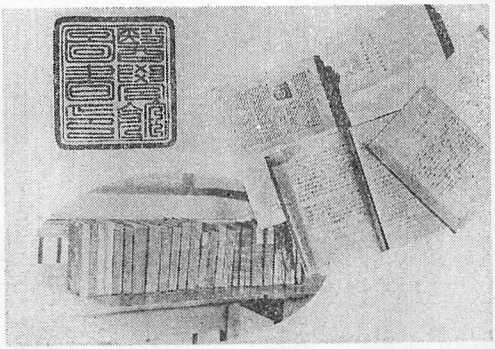

図 2　医学館時代の図書および図書印

なお真木和泉守は久留米で初めて蘭方を開いた工藤謙同と親しく、謙同も志を同じくする同志であった。したがって和泉守の子弟で医学を志す者は蘭方を選んでいる。久留米藩医学館も漢蘭併用であり、明治維新では早くも英方を取り入れている。昭和五十八年筆者は、工藤謙同の頌徳碑（図4）を水天宮境内の真木神社の側に建設することが出来た。

以前は医史学会で時折り報告したが、九大の史学会で話したこともある。その頃は日本史・東洋史・西洋史合併で催された。ある時の会合で、久留米藩における名君頼永の病症をめぐり、漢蘭医学の争いがあったことを話した。その節京都大学から特別講義に来ておられた教授が、「かつて久坂元端の書というものを持ってきたが、どうも内容からおかしいと思っていたところ、今日のお話で小石元端のものとわかった」と話されたのを覚えている。

その後は病跡学の研究に移ったが、医史学とは重なる面も少なくない。戦国の名将上杉謙信（図5）の死因の如き、古来諸説があり、外傷説、消化器系統の疾患、脳卒中説などである。謙信の養子景勝が家臣にあてた手紙に、「不慮の虫気執り直られず遠行」とあるので、虫気は中気のあて字で、脳卒中死とするものがある。

これに対して虫気はムシノケと読むべきで、腹痛とくにみぞおちの部の疼痛とし、猛烈な腹痛を訴え、そのまま重病となって死亡したとの説もある。さらに俗書ではあるが、『松隣夜話』の記事に、死の前年の末頃から日を追うて痩せてきて、銃丸の如きものが胸につかえて食事を吐いたとあるので、食道癌もしくは胃の噴門癌との説もあらわれた。

この虫気すなわち「むしのけ」という病気は、漢方医学には見当らず、俗語と思われる。おそらく寄生虫による胃腸疾患に端を発し、小児や婦人の病などに広く用いられ、時には病気の代名詞のようになったのではなかろうか。

一方謙信のような大酒家には胃腸障害はつきもので、食道癌が酒客に多いことも統計上明らかである。したがって歿年に近づくと、嚥下困難のような狭窄症状が現われたことも考えられる。しかし直接の死因は、便所で卒倒して意識を失い、五日目に息を引きとったというから、脳卒中であり、食道癌のごときは合併症と考えられる。日頃の大酒と、粗食に甘んじて良質の蛋白質をとらず、その上東奔西走の過労が、脳血管の硬化を来したにちがいない。

図 6　西郷隆盛画像（床次正精筆）

図 5　上杉謙信画像（死亡直前に写したもの）

西郷隆盛（図6）についてはいろいろ調べたことがある。情誼に厚い彼が英医ウイリスを鹿児島医学校に招いたことはよく知られている。これより先にあまりに肥満して故障も出たので、明治天皇の命でホフマンが診療した。西郷の手紙からすると、動脈硬化の初期かと疑われるが、その指示に従って真面目に療養し、これが大隈山の狩倉につながって山中の歩行など普通の者よりも速かったという。

西郷は君士的英雄といわれるように、名利にとらわれなかった。徳富蘇峰は高踏勇退がその病気であったと書いている。これはその修養や体験がもたらしたものと思われるが、なおその奥には、大詩人ゲーテの晩年にみる感情生活の周期性、すなわちカールバウムやヘッカーの言うチクロチミー(Zyklothymie)も考えられるようである。かつて宮崎市で日本医史学会の総会が開かれた時に、特別講演を頼まれて真木和泉守と西郷隆盛について話したことがある。

なお医史学関係の著書としては、真木和泉守自刃百年祭が久留米の真木神社で行われた際『真木和泉守と久留米医学』と題して小冊子を作り、参詣者に配布したことがある。非売品であったが、それが今日では東京神田の書店で意外に高い値段がついているのに驚いた。

（日本医史学会名誉会員）